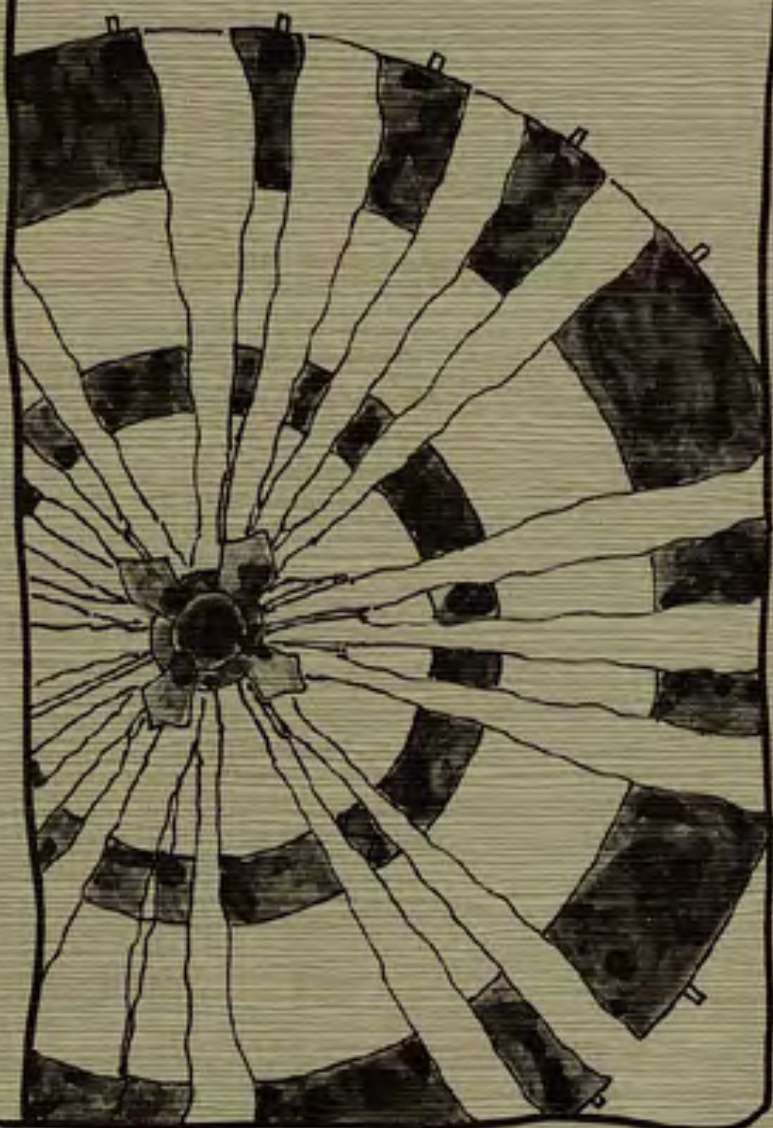


やぶれ傘



一一〇号

二〇一九年十月

聞きとれぬままにうなづきある夜長
根橋宏次
敗荷の隙間隙間が夜にひかり
大島英昭
ちちろ鳴くこつちを向いてゐるやうに
きくちきみえ

灯の下にルパン・ホームズ黒葡萄
青谷小枝

風少し狗尾草の揺るるほど
廣瀬雅男

十六夜の月眺めつつ貴腐ワイン
瀬島酒望

蓮の実を見て思ひ出す豚の鼻
丑久保 勲

こほろぎがメトロの駅の壁の際
藤井美晴

目障りにならぬ鉄塔今日の月
渡邊孝彦

試し掘りの男三人芋の秋
白石正躬

もう雨か森の深きに秋が来て
安藤久美子

裏道はこんなに静か秋の午後
小山よる

漬けものは何にしようか零余子飯
天野美登里

気休めの水遣りにゆく夏の畑
秋山信行

空つぼのリフトが動く赤とんぼ
有賀昌子

抄 集 句 傘 紀 大 崎 ぶ や

凌霄花モスクの壁をよじ登る
松村光典

うろこ雲目が乾くまで見てゐたし
中島和子

信号を待つやこの風あきのかぜ
貫井照子

門ごとに迎へ火を焚く漁師町
野口希代志

長雨の茄子は歪になつてゐる
萩原久代

皿に置く匙音ひとつ秋の夜
武藤節子

女子だけでカヌーを運ぶ夏の海
森 美佐子

ブナ林をハイカーたちの夏帽子
山本久枝

川下る浚漈船へ大西日
湯本 実

アルバイト漫画見ながら夜食たべ
安齋正蔵

南瓜割る菜切りの背跡手のひらに
泉 一九

稲妻しきり懐中電灯そばに置き
亀岡睦子

稲架低く組んで海辺の棚田かな
倉澤節子

あるはずの断崖絶壁霧のなか
佐藤稲子

のぞきこむ新聞受けにいぼむしり
篠崎志津子

交 差 点 向 か う の 人 も 汗 を 拭 き
 夢 に 逢 ふ 夫 は 語 ら ず 遠 花 火
 窓 の 向 か う を 足 早 に ゆ く 白 日 傘
 う ろ こ 雲 目 が 乾 く ま で 見 て ぬ た し
 稲 刈 の た け な は に し て 空 広 し
 将 棋 盤 二 つ に 折 つ て 夜 の 秋
 秋 彼 岸 女 の 多 き わ が 親^うか 族^ち

中島和子

海 と 山 見 え 老 鶯 の こ 糸 し き り
 一 鉢 の 鶯 草 に 夜 の 来 た り け り
 白 桃 の 匂 へ る 夜 の 仏 間 か な
 や は ら か き 風 と ほ り け り 夏 座 敷
 明 珍 の 箸 の 風 鈴 け ふ は 晴 れ
 袂 お さ へ そ つ と 灯 籠 流 し け り
 信 号 を 待 つ つ や こ の 風 あ き の か ぜ

貫井照子

野口希代志

泡立草すべての羅漢像隠し
夏休みの課題はひとつ逆上がり
S L の走り去りゆく立葵
金管楽器きらきらと西日差す
門ごとに迎へ火を焚く漁師町
「支度中」と看板の店立葵
栗を剥く臆鞆炎を気にしつつ

萩原溪人

長雨の過ぎてすぐさま蟬時雨
白樺の向かう谷川岳の夏
支へ木を越ゆるトマトの実の熟れて
どばみみずちよん掛けにして湖に釣る
腰の鈴鳴らして夏の原生林
朝市の声の飛び交ふ黄蜀葵
ヨイトマケの唄流れくる終戦日

萩原久代

長雨の茄子は歪になつてゐる
化粧せぬ顔堂々とサングラス
ひぐらしの鳴きゐる宿にやつと着き
山あひの村に大きな氷室かな
目の前をゆるりと大きな鬼やんま
薬湯に身を預けゐる夏の旅
台風一過タオルを首に庭掃除

橋本美代

祭礼に門扉を開く勅使館
酷暑来て読書にはげむ日々過ごす
父の形見と腕貫見せる盆の僧
自転車に子を二人乗せ秋暑し
マンションの子の細き中庭昼の虫
家移りし友息災か敬老日
長命の金魚の母子秋の雲

濱野新
部活動の合宿の昼冷や素麺
台風の予報に簾外しけり
青柿を数多散らして風雨去る
秋気澄む山の向かうに富士の影
秋晴れの空を見上げて欠伸する
秋うらら池面に映る雲白く
敬老日ひとり日課の散歩する

広瀬 濟

夏宿の自慢は鯔の一夜干し
子を扇ぐ母の団扇の止まりがち
昭和以来続く碁敵夏座敷
賑賑しく子供神輿の通り過ぎ
灯を消してちちろの声に耳すます
稲を刈る一筆書きのコンバイン
新築の柱のほふ秋涼し

本郷美代子

蟬の声辿りて行けば家の壁
秋立つ日夫と連れ立ち六本木
秋蟬の小さき声を聞きにけり
シヤッターの降りたる店の白木槿
久々の友と語らふ良夜かな
のぼる鮭落ち来る水にもどされて
水澄むや水輪大きく跳ねる魚

本田武

駄菓子屋の中に入り行く浴衣の子
鴉みな口開いてゐる大暑かな
「やめられぬ」掛け声上げて阿波踊り
山門を入れば隈なく貴船菊
爽やかや宿坊を出て勤行へ
鰯雲恋瀬川越え筑波まで
灯の消えし災禍の町の秋の月

雨の日の夏の祭の終はりけり
蟪蛄の洗濯物に揺られをり
秋近し光る新子の寿司二貫
クーラーのリモコンいぢる風呂上り
今年また「駒形」に来て泥鰌鍋
秋の夜の厨に近く虫の声
木の枝を払ひて夕の冷し酒

増田祐司

口実は何でもよろしビール酌む
雲海に乗る黒き富士機窓より
ウインドに土鈴添へあり風知草
名水で絵具を溶いて瀧を描く
氷菓舐む波に千鳥の旗の下
青田波間もなく追肥まく作業
二十二階より四か所の遠花火

松本善一

箕田健生

少年が見事に仕切る神輿かな
かき氷食べで一服すること
入院する妻に付き添ふ炎天下
揚げ花火急に飛び交ふ鳥の群
唐風の館を映す秋の池
ひぐらしや新宿門の閉まるころ
椋鳥の巣穴となりし椎の幹

武藤節子

長梅雨の机の上の未処
ドアママンの白き手袋
蟬しぐれ止みて遠くの蟬しぐれ
皿に置く匙音ひとつ秋の夜
星飛んで咄嗟に願ひ浮かび出す
いつの間にか仁王の脛に虫の穴
秋夕焼立てかけてある竹箒

村田 武

「大變だね」と草取る人に声を掛け
二度三度外に出てみる盆の月
閑静な住宅街の酔芙蓉
寝る前の無月の空をもう一度
花真菰暮れゆく土手に揺るかな
爽やかや日の出づる時出勤す
苧田道遠くの土手のあたりまで

森 美佐子

女子だけでカーヌーを運ぶ夏の海
幕間に小倉アイスを食べてゐる
梅雨明けの雲なき空に白き月
との曇り手持ち無沙汰の海の家
磨ぎ汁を庭にまきやる秋初め
如雨露持つ手を秋の蚊に刺されけり
信号を待つつ間頭上につくつくし

山本久枝

ブナ林をハイカーたちの夏帽子
マシユマロのやうな手触り梅雨茸
曾祖父の顔知らぬ孫墓洗ふ
夜濯ぎはタオル二枚の旅の宿
みんみんのこゑを身近にひと日過ぐ
観覧車回る大空鰯雲
お手玉の中の数珠子の音のよく

湯本正友

店頭前に幟靡かせ鯨を干す
波頭舷側に受けヨットいく
海霧の幕おちたかに富士の峰
露の葉を甘煮に仕上げ夜の卓
法要の銅鐸に混じりて外は雷
朝まだき風を残していく野分
秋の宵厨を仕切る暖簾ゆれ

湯本実

鰻弁で土用の丑を済ませけり
川下る浚渫船へ大西日
日の盛り杭打ちの音響きけり
境内を幕で囲んで夏舞台
遠ざかる急行列車蟬しぐれ
盂蘭盆会子供の声の溢れけり
ひもじさの話ばかりや敗戦忌

吉田幸恵

土手越えてゆけば向日葵咲く畑
刈草の乾きて草の山低く
おくれ毛の揺れあるバスの藍浴衣
風よ来よ夫と鎌持つ早畑
指先に骨を捕らへて捌く鰯
無花果を挽ぐ指先の力抜き
吾亦紅ゆらし過ぎ去るサイドカー